
魔法少女リリカルなのは 喰う死体は何を求む

上条信者

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 囓う死体は何を求む

【Nコード】

N0401W

【作者名】

上条信者

【あらすじ】

正体不明経歴不詳、怪しさ爆発の謎の男ジョン・ドウ。彼は自らが生み出された経緯を知る為、唯一の手がかりであるロストロギアを追いかめ様々な世界を渡り歩いてきた。そんな中、あるロストロギアに関する情報が彼の耳に入った。曰く、そのロストロギアの名は“闇の書”。あらゆる魔法を記録する為に存在していたが、今は歪んだ悲劇を産む害悪と成り果てたロストロギア。彼は自分の正体を知る為に、そして産まれてきた意味を追い求め、闇の書の追跡を開始した……………。

プロローグ a (前書き)

ダイジェスト的プロローグ、短い。

プロローグ a

「ひょとりボロ着てゝさすらうゝジョン・ドウゝ。引き摺るゝ腸にやゝ糞もねえゝ」

「・・・・・・・・お前、何もんだ」

「どうもゝ、ミッドチルダから着ましたゝ。ロストログア専門のフリーランス兼時空管理局民間協力者、歩くロストログアことジョン・ドウでえゝす」

「っ！時空管理局・・・・・・・・！」

「カカカ、ちょっとした伝手でなあ。お前なら知ってかもしれねえと思つてよお？」

「あ？何言つてんだてめえ」

「なあに赤髪の嬢ちゃん、大したこっちゃない。お前らが記録した魔法の中で似たようなものがないか知りたいだけさ」

「お前・・・・・・・・！」

「なあ、俺は誰だ？」

プロローグ a (後書き)

次回の更新は未定。

ゾンビ系主人公っていうより、ベルセルクに近い（前書き）

今回の主人公を作る際影響を受けた作品のキャラ。

ベルセルクよりガッツさん。

エバーニングよりジョン・ドウさん。

皆の主人公、球磨川さん。

仮面ライダーエターナルより克己さん。

これらを混ぜ合わせてペッしたのが、うちのジョンさん年齢不詳です。

ゾンビ系主人公っていうより、ベルセルクに近い

プロローグより話は戻り数ヶ月前

「グウーレエーアームウ」

「………ジョン、今回は随分とボロボロだな」

「ああ？　それでもねえよ。精々一回バラバラに吹き飛んだぐらいだ」

「確かに、服が下半身しか残っていないな。服というよりもはや腰巻だが」

「てめえの寄こしたあのロストログアの情報は正しかったんだがよ。どうやら自爆する機能が付いてたみてえで、手に取ったとたん地下施設ごとドカンよ。地中から再生して這い上がんのに一週間かかったぜ」

「力技でいつも素早い解決が信条の君からの連絡が遅いわけだな」

「それを言うならお前もだろ糞爺、憐れな次元犯罪者共を説得するお仕事はご無沙汰かよ」

「流石に、私も年だからな。現役は降りたよ」

「あー……、最後にあったのはもう十年ぐれえ前だったか？そんなくらい経てば確かにお前の頭に白いのが増えてる訳だ。あーやだやだ、昔馴染みはどんどん逝っちまいやがるし、三提督は既に棺桶に片足突っ込んでやがる」

「年を取らないというのも考えものだな」

「あー全くだ。まるでてめえだけタイムスリップでもしちゃったみてえだよ」

私の職務室までアポ無しで現れた昔馴染みは、担いでいた彼の相棒を肩にかけソファに身を埋めるように座り込む。

ギシッ、とソファが大きく軋むことから、相当な体重があるのが解り、実際三人は余裕を持って座れるソファの大半を占めるほど彼は大柄だ。

意外と経費のかかったソファの具合を心配しつつ、私は昔馴染みの何気ない会話を楽しむ。

この年になると、思い出を共有できる友は少ない。

今この身を蝕むあの忌まわしき思い出以外の騒がしくも楽しい日々を思い出させてくれる彼の存在は、老い先短い私には過ぎる財産だろう。

彼の名はジョン・ドウ、黎明紀から管理局の民間協力者としての立場を貫きながら、かの有名な三提督などの様々な部署の長達の旧友として非常に顔の広い男だ。

一体いつ産まれたのか、出身地はどこなのか、そもそも何者なのか、個人情報というものがこれといっていいほど謎に包まれた男だが、

ニツとにやつくその顔からは大凡こちらを不快に思わせるようなモノは感じられず、それどころか無邪気に悪戯を思い付いたような子供の感性を思わせる。

実際は私より遥かに年上なのであろうがな。

彼の正体を知っているのは私を含め彼の親しい人物だけだ、その数はここ十年で随分と減ってしまったようだが。

幾多の歴史を生き字引として刻んできた彼の顔からは、見た目とは違い大きな無常感を持て余している老人のようだった。

お互いに世知辛い現実を浸っている者同士の傷の舐め合いといえは聞こえは悪いかもしれないが、少なくとも私達の間には尊重と労いと心遣いがあった。

「さうて、どうしたもんかね。今回も外れちまったし、旅費とその他経費のお陰で金もすっからかんだぜ」

「殆どは酒代だろう？」

「カカカ、ちげえねえ！」

「どうだい、ベルカの古い奴が一本の残ってるんだが」

「白か赤か」

「君、僕が赤以外飲むと思うかね」

「エクセレントッ！！」

パン、と手を叩いて大喜びする彼に苦笑し、午後のスケジュールっ

て確か重鎮パーティーだったけなと思いながらアリアとロッテを呼び出す。

「お父様くどうした・・・のお？」

「ロッテ出口で立ち止まらないで・・・よお？」

「よお、久しぶりだな糞猫ども」

今回の情報をリークした張本人であるアリアとロッテは、ほぼ裸人と変わらぬ彼の姿を見てさー、と青ざめていく。

我が娘に酷な仕打ちをするようだが、散財の責任はこちらにある、それに彼の気が納まらないだろうし。

残念だが、現役を退いた私に彼を止める力はない。

大人しく彼からの罰を受けてもらうしかないだろう。

「んく？なんだったかなあく？今回の情報は確か研究者の発掘した比較的安全なロストログアだったよなあく？」

「アリア！」

「ええ！」

「甘いわ」

「うにゃあああああああ！？汗くさっ！むさ苦しいから放せこの筋肉だるまあ！」

「い、いやあああああああ！？このままの状態で部屋を出るつもりなの！？やめてえ！そんなことしたら明日から管理局を歩けない！」

「カカカ、無駄無駄あ。 このまま貴様らの醜態を曝しながら廊下を練り歩いてやるよ」

「い、いやあああああああああああああああ！……？」

悲鳴と共に扉から消えていく彼と小脇に抱えられている2人。
久しぶりに楽しい思いをさせてもらって気分が良くなっていた私は
今夜開けるワインの味を想像した。

「ううゝひどいよお父様あゝ」

「ハハハ、お前にはいい葉かもしれんな」

「私、もうお嫁にいけない・・・」

「貰ってやろうか？」

「「ノウサンキュー」」

しばらく開けていなかった我が家の扉を開き、業者に定期的にクリーニングさせているソファに腰を下ろした。

彼は少々肩幅が窮屈な管理局の制服の上着を羽織り、かなり大きなサイズのズボンを履いていた。

ファッションというにはかなり無理のある恰好だ。

「さて、酒は何処だ？もうたまんねえよおらあ」

「飲兵衛だね、相変わらず」

「持ってた酒は全部吹っ飛んじまったしな。新しく買おうにも金もねえ。つまり久しぶりの酒の訳だ」

「あーあーだらしない顔ー」

「黙れ雌猫、酒は人生の命終の薬よ」

苦笑しながら、秘蔵の棚から酒を取り出し、カップを持って机に置いた。

「これだこれ!! いいもん持ってんじゃねーかよ! 流石は官僚! 持つものが違う!」

「君も管理局に入ればこれくらいすぐ手に入るだろう?」

「バカ野郎、たけー酒は他人のだからうめーんだよ」

遠慮なく並々とワインをカップに注ぎ、乾杯しながら軽く舌で味わう。

「かー! コンビニのカップ酒とは違うぜ!」

「お父様ー、明日もお仕事だから飲みすぎたらメツだよー」

「そうだよお父様。このザルの飲む量に付き合ってたら酒がいくらあっても足らないよー」

「おう猫共! お前らも飲むか!?」

「「酒臭っ!!」」

おいしい、既に半分も無いぞ……。

高かったんだがなあ……アレ。

ま、酒は飲むものだ。

友との祝杯なら構うまい、……あ、ちょっとまだ一杯しか。

「テンションが上がってきた！」

「……お手柔らかに」

「酒が尽きたらな」

「えっ……」

そうだった……彼に酒を飲ませたらいけないんだったな……。

会うのが久しぶりだったからすっかり忘れていた、彼がクラナガン
を一度陥落させ掛けた原因が新年の忘年会での酒だった。

酔った勢いで管理局本部の食糧庫を目指していた彼を止めようとし
たキール元帥を殴り飛ばした事を発端に始まったあの事件は、管理
局始まって以来の伝説の襲撃事件として知られることとなり、年配
の局員の中には彼を見るだけで軽く鬱になる程ものだった。

ふとアリアとロッテの方を見ると、彼女達も漸く気付いたようで既
に血の気が引いている。

今の自分に彼を止める事が出来るか……？

現役時代の彼との戦績を思い出しながら、倉庫を漁っている彼の後
姿に向けて不意打ちの体勢整えようとする。

「おい、久しぶりの酒だあ。気持ちよく飲ませてくれやあ」

「すまない、私は友として君を停める義務がある。例えこの身を犠牲にしようとも」

「そんなっ、お父様！」

「矢面には私達がっ」

「いいゝ心がけだあ、しかし既に前線を退いたお前に俺が止められるかあ？」

「舐めないでほしいな、君の攻略法ならとっくの昔に編み出しただろう？」

「クカカカ、同じ手に嵌るほど、俺は研鑽を緩めた覚えはないのだから」

ゴキゴキと首を回しながら立ち上がり、ゆっくりとした動きでこちらに振り返る彼の顔は、案の定酒に酔って赤くなり目の焦点が揺れていた。

この状態だと普通の人なら確実に弱くなっているだろう、だが彼の場合は逆効果だ。

普段は気を貼って抑え（・）っ（・）け（・）て（・）い（・）る（・）身体能力のリミッターが外れ、それこそ竜種をも超えた力を解放することになるのだ。

魔法の身体強化など、彼にしてみれば紙が画用紙程度の強度に増し

いざ行かん、戦場へ

ゾンビ系主人公っていうより、ベルセルクに近い（後書き）

最後の意味不明な暴走っぷりは見なかったことにしてください。

原作搭乗者との関係性を考えていたらこんな訳のわからん奴になっ
てしまった。

後悔はしてますん。

原作始まりはもうちょい後カナ。

何も考えず突撃できるって気持ちいいよね

「現在、上空200メートルから目標に向かって降下中」

『了解しました。そのまま目標との接触に備えてください』

「了解っ。いやーそれにしてもこの世界もバカにできんな。魔法の力なしで空飛べちゃんうんだもんなー」

『そうですよねー。ウィングスーツでしたっけ』

「そうそう、使いこなすのに訓練必要だけどな。これは楽しいぞ」

『その他にもこの世界の文化は私達とは別方向で進化していつてま
すし、魔法が無かったら私達よりすごいですよねー』

「お、雲を抜けた。目標まで約10分」

『んふふ、特殊部隊っぽくて楽しいですね。フリークス1、迎撃
準備！』

「了解、フリークス1、これより迎撃態勢に入るオーバー」

『以後現場の判断はそちらに委託します。多角的に臨機応変に対応
してくださいオーバー』

「リンディ……年食っても変わらんね、お前」

『お互い様ですよジョンさん、健闘を祈りますよー』

「祈られよう」

「っ！？なんだ！？」

「結界が破られた！？」

「何っ！！？」

「来たっ！」

「やっとかい！」

「なのはっ！転送するからその場から動かないで！」

「ふえええええ！？わ、わかった！」

突然、轟音と共に何かが碎け散るような反響が響き渡った。

広域結界と呼ばれる一般的に魔法の秘匿目的に使用されることも多い物だが、術式の違いやその頑強さはアースラの精鋭たちを持ってしても手に余る代物だった。

しかしそれがまるで砲弾に打ち抜かれたようにパラパラと散っている。

余程の衝撃なのが、その様子だけで推測できた。

そして碎かれた結界のヒビの中心部より飛来する何かを全員が捉えた。

「……人か？」

ポツリと、騎士然とした出で立ちのピンク髪の女性がそう零す。

急速にこちらへと迫って来るそのシルエットは確かに人の形をしていたが、それを視認するのは常人には不可能だっただろう。

徐々に近づくシルエットが、突然向きを変える。

こちらを囲むように旋回し、やがて自分たちと同じ高度へと到達したとき、パラシュートが開き目測約700メートルの位置のビルに着地した。

「あれは一体？」

「解らん、だがこのままでは不味い。退くぞ」

「けど・・・！」

「既に逃げられた。・・・また次を探せばいい」

「くっ・・・ちつくしょー！！！」

言われて振り返れば、既に自分たちの標的は結界の崩壊と共にこの場から離脱していた。彼女達の目的は突如起きた不測の事態により見事失敗に終わっていた。

赤い少女が天に向かって叫ぶ。自らの無力を嘆くように。見上げた故に唯一気がついた。空に浮かぶ何かに。疑問に思う。あれはパラシュートだ。

よく見る。文字だ。

この国言葉。

意味は。

『お前の後ろにいる』

振り返った。

「よう」

衝撃を感じたと思う。

しかしその時には既に赤い少女は向かいにビルに突っ込んでいた。

「っ!？」

「なっ!？」

突然の起きた出来事に反応したのはそれから数秒後。

人とは違う構造で創られた戦士達は、人として存在がしたが故に急な事態に対しての反応が遅れた。

何かが通り過ぎた。それだけは解った。

目的を果たせなかった以上ここに留まる事は、そのまま自分たちの正体を管理局に曝すことになる。それを避ける為に撤退を決断して数秒の出来事。

彼らが正直な感想を言えば、動揺もしていたし呆然ともしていただろう。

だが、事態はまだ終わっていない。

ドゴオオンツツツ!!!!

轟音と共に穴のあいたビルから何かが飛びだしてきた。

真っ直ぐにこちらに突き進むそれを、途中で認識できたのは僥倖だ

った。

なぜなら視界捉えたそれは、赤い少女だったからだ。

騎士は慌てて飛行しているルート上に割って入り受け止める。

「大丈夫か！ ヴィータ！」

「ぐう・・・！ なんつー蹴りだよ・・・！」

腹部を抑えたヴィータと呼ばれた少女は、辛そうな表情をしながらも、その眼には未だ気炎が在った。

一先ず無事と確認した騎士はヴィータを離すと手短に事情を聞く。

「一体何があった？」

「よくわかんねえ、ケホッ！ ビルの中に突っ込んだと思ったら、顔が見えないやつと戦闘になったゲホッ！ くそっ、ふざけやがって！」

「落ち着け。・・・誰かに奇襲されたという事か、奴等以外の魔導師といったら思い付くのは先程のパラシュートだが・・・」

犬耳のようなものを頭から生やした大男がそう呟く。

その推測にヴィータと騎士も頷いた。

「何にしても、早く離脱しなければ」

「つれねえこと言うなよ、姉ちゃん」

「「ッ!?!」」

声を掛けられた。

その方角を追って神経を飛ばすと、そこにはビルの屋上に立つ大きな人影があった。

身長、体重共に犬耳の男よりも逞しい身体つきをしており、ぱっと見ただけで身長が2メートルに届いている。全身黒塗りのスーツを着込んでおり、背中には身の丈に届く巨大な大剣を背負っていた。しかし何故か顔には黒と白に分かれた奇怪な模様のマスクを被っており、その正体を怪しく包み隠していた。

常夜の暗闇に溶け込む様な恰好をしているのに、街灯などの光に大剣だけは鈍い光を反射する。

まるで死神のような姿だと、その場にいる騎士達は思った。

「……何者だ?」

「おいおい、そりゃこっちのセリフだぜ? こんな世界に魔導師を狩りに来るてめえらこそ何者だよ? ……ま、大体は予想は付くけどな」

「何……?」

聞き捨てならない言葉が目の中の人物から発せられた。

自分たちの正体を、この男は気付いているのか? だとしたら不味い。

それがバレてしまえば、今後の活動に差し支える。残された猶予はあまりにも少ない。余計な時間を掛ける事は出来ないのだ。おそらく男は管理局の手の者だ、帰す訳にはいかない。いつかバレるにせよ、その発見を少しでも遅らせなければ。

ヴィータと犬耳の男に視線を合わせると、2人とも同じ結論に辿り着いていたのか、自分と似た表情をしながら頷いた。

そうと決まれば、男にはしばらくどこぞの世界で放置させて貰う。

「すまんが、貴様には・・・」

「あーあー、能書きはいい、とっととかかってこい。口で語る言葉はあんまり信用してねえんだよ、おらあな」

「そうか、ならば・・・参る！」

油断せず、初めから全力を持って仕掛ける。

先程の自分たちですら視認を許さない奇襲。それだけの移動能力をどのような魔法で可能にしたのか解らないが、十分脅威、いや凶悪だと言えた。もし誓いと非殺傷設定がなければこの場で殺しておきたいと思えるほどに。かつての戦乱の駆け抜けてきた記憶を、あの奇襲で幻視した。ならば手加減は無用、一撃を持って必殺とする。体格的に上段の構えは不利、下段による攻撃が有利。人間は、例えば歴戦の戦士であろうと、下からの攻撃というあまり想定していない攻撃は苦手だ。長身の自分をしてさらに巨大なこの男と比較すれば、子供と大人程の身長差がある。この攻撃で隙を作り、ヴィータや犬耳の男が挟撃する。

幾多の時を共に過ごしてきた戦士達の連携は、完璧と言えた。ただ、それがまともな相手ならだが。

途中、強烈な違和感が騎士を襲った。

避けない。男が自分たちの攻撃を、避けるそぶりすら見せない。

自分の剣閃も、ヴィータの鉄槌も、犬耳の男の拳も、まるで見えていないかのようにその場に突っ立っているだけだ。いくら長年の記憶ですら見たことがない程見事な体格をしているように、その頑強さを貫き通す程の矛で自分達は挑んだ。

舐められているのか？先程の奇襲で実力の見聞は十分だと？どれほど疑問を持つと、剣は既に抜き放たれている。止める術はない。だから騎士はそれを男の驕りと断定し、男へと斬りかかった。

「ぐふっ・・・！」

極まった。剣は男の脇腹を、鉄槌は顎を、拳は首の頸椎を。それぞれ重大なダメージを与えたと確信できる一撃。剣には骨を折る確かな感触があった。少なくとも、騎士達の誰もが呆気なく、男を戦闘不能にできたと思った。

だが、騎士は男の嗤い顔を見た。白黒に別れた奇怪な模様のマスクによりその表情を読み取ることはできない。正確に言えば、そうだと直感した。

攻撃直後の僅かな隙、沈みこむ男の身体、それと同時に引き抜かれる大剣、驚愕に歪む仲間達の顔。騎士は一瞬の中でそれらを理解し、僅かに、しかし全力で身体を退いた。

ほんのコンマ数秒前まで己がいた場所に、大剣が背筋が寒くなる程の速度を持って空を切って通過した。

「ちっ、惜しいな。やっぱ肉を切らせんのも限度があるか」

心臓の鼓動が速くなる。この男は余裕だ、あれだけのダメージを与えられてなお。緊張と不信が身を包み、男の得体の知れなさがさらに引き立った。

何故男は動けるのか？自分達は殺さないまでも、全力を持って男に仕掛けた。脇腹を折り、脳を揺らし、神経に衝撃を与えた。しかしそれだけの攻撃を同時に受けても、男は嗤いながら平然と反撃を仕掛けてきた。その異常性に、困惑を我慢しきれなくなったように、赤い少女が男に向けてこう言い放った。

「てめえ・・・何もんだよ？」

そして男は剣を振った体勢から立ちあがると、こちらを見上げて高らかに叫んだ。

「ジョン・ドウ！俺の名はジョン・ドウだ！！名を無くし、記憶を喪失くし、人間まで捨くした！正体不明経歴不詳、歩くロストロギアジョン・ドウとは俺の事よ！！！」

大剣を背負い直し、両手を広げてそう高らかに告げる男の姿に、困惑と同時に親しみを覚えた。その姿はまるで悪戯が成功して喜ぶ子供のようなだった。

先程までの怪しさが嘘のように、晴れ渡るような声に騎士達はしばし呆然とする。

『皆！転移の準備が出来たわよ！！』

『ッ！解った、頼む』

念話で味方からの通信が入った。どうやら引き時だ。

この得体のしれない謎の男との勝負はこれで決着だ。騎士としては、自分たちが普段とらない集団戦法を使ってまで御し切れなかったこの男との勝負に胸が躍らない訳ではないが、事情がそれを許さない。もし違う出会い方をしていれば、もう一度、次は一对一で手合わせを願いたいものだと思っただ。

「んんだあ？お帰りか？」

「・・・そうなるな」

「そうか。ま、また会うこともあんだろ。今日のところはお預け、か」

少し残念そうにそう呟く男、ジョン・ドウ。怪しさ抜群の彼の恰好や雰囲気は、ヴィータと主が見ていたヒーロー番組の悪役ようだ、と騎士は思った。だがその印象とは真逆に、まるで子供のような男だと思っていた。どちらともつかないあやふやな人物像は、騎士達に強烈な印象を残した。おそらく、今後の活動で一番の障害になるだろう、と。

「こっちで張った結界も、術式の違うてめえらを抑えてはおけない。次も死合おうぜ」

「望むところだ」

「てめえ！調子に乗ってんじゃねー！」

「・・・応」

そうして騎士達は転移し、ジョン・ドウだけが残された。

しばらくその場で佇んでいると、空中に画面が浮かび上がった。画面にはアースラの艦長、リンディ・ハラオウンと、その息子であり執務官である少年、クロノ・ハラオウンが写っていた。

「よう、逃げられたぜ」

『そのようですね。人相と特徴は？』

「バッチリ記録してある」

そう言ってジョンが取り出したのは小型のカメラだった。

「さて、すぐに戻って分析だな」

『・・・真面目にお願いしますよ』

「クロクロ、俺が仕事を真面目にするわけねーだろ。だって仕事だぞ？」

『訳の解らない言い訳しないでください。あとクロクロ言うな』

「後聞いとくことあるか？」

『………特にないです』

「了解、んじゃ戻るわ」

そう言って通信を切り、時間の戻った街を見下ろす。

そこには街灯やビルの光が反射し様々な色を放っていた。

ジョン・ドウは、それらを一望した後空を見上げてポツリと言った。

「あーあ、今回は当りだといいいんだがなあ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0401w/>

魔法少女リリカルなのは 囓う死体は何を求む

2011年12月24日12時54分発行